

2026年度 C日程

文学部 中国語中国文学科

現代の国語、言語文化

〈近代以降の文章〉

注 意

- 開始の指示があるまで、この問題冊子を開かないでください。
- 机上には、受験票、黒鉛筆、消しゴム、時計以外のものを置かないでください。
- 受験票と机の上に貼ってある受験番号が同じかどうか確認し、問題冊子と解答用紙のすべてに受験番号と氏名を記入してください。
- 解答は、すべて解答用紙に記入してください。
- 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせてください。
- 不正行為について
 - 不正行為に対しては厳正に対処します。
 - 不正行為に見えるような行動が見受けられた場合は、監督者が注意をします。
 - 不正行為を行った場合は、直ちに受験を取りやめさせます。
- 試験終了後、この問題冊子を持ち帰ってください。

受 験 番 号	氏 名

【二】 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

納屋^{なや}の背戸から涼しい風が吹いて来た。竹藪^{やぶ}の葉群^{はむら}が風に戦^{そとよ}ぎ、納屋の土間から見ていると、黄色く変色した葉の残る、篠竹^{しの}の葉裏が目の中で騒ぐようだ。

村の子供たちはよく遼^{りょう}一の家の納屋^{むしろ}に筵^{むしろ}を敷いて廻^{まわ}り将棋をやった。盤の上で金将^{きん}を振って字の書いてある方が出たら、その数だけ前へ進む。一枚でも盤から飛び出したらシヨンペンだ。四枚とも表だと、

「おめでた」

と言って、もう一度振れる。歩兵^{ふへい}から始まって、次の隅^{すみ}に上がると、香車^す、桂馬^{うま}、銀将^{ぎん}、と順番に位が上がって行くのだが、自分より位が上の者に追い越されると、

「死んだ」

と言って、自分の駒は背中を見せて盤の内側に寝返る。そして再び上の者に追い越されると、

「生き返った」

と言って、駒は蘇生^{そせい}するのだが、死んだ駒の横に並べられると、

「また死んだ」

と言って、更に次の地獄へ墮^おちるのだ。暁夫^{あきお}の駒は死んだままになっていて、誰かに追い越されるのを待っていた。已^{すで}に俵屋^{たけや}の糸吉^{くめきち}は角行^{かく}にまで進んでいると言うのに、彼は歩兵のまま生き返るのを待っていた。手持^てフサ^{フサ}な気持で表の庭を見ると、軒先に玉葱^{たまねぎ}が吊^たるしてあって、毒々しいほどあざやかな紅躑躅^{つづし}が五月の陽^ひに輝いていた。

暁夫は遼一たちと六尺近くもある青大将をなぶり殺しにした日、婆^{ばあ}さまと村のどうい^いよへお参りに行って、地獄極楽の絵を見せて貰^{もら}ったことがある。婆^{ばあ}さまは、

「お巳^みイ様を殺したら今度^{うま}生れて来る時、おまはんが蛇に生れて来るんやでエ」

と言った。婆^{ばあ}さまは鳥のような目をしている。暁夫はその話を、一緒に蛇をなぶり殺しにした遼一に話した。二歳^{ふたつ}年上の彼は、

「嘘^{うそ}じゃ、そんなこと」

と言った。暁夫が黙っていると、

「嘘やな、糸、お前も嘘や思うやろ」

と、これも一緒に蛇をなぶった糸吉に相槌^{あいづち}を求めた。糸吉はアイマイ^{アイマイ}な笑いを浮^{うか}べて、二人を見較^{くら}べただけだった。すると遼一は、大阪の親戚^{よしみ}の家へ連れて行って貰った時に見た、ドイツの空想科学映画「透明人間」のことを糸吉に話し始めた。

「透明人間になったら汽車でもバスでも只子^{ただこ}で乗れるんやど」

さも自慢気な物言いをする遼一に、^①暁夫は妬^{ねた}ましさを覚えた。自分と同じ虞^{おそ}れが遼一の血の中にも流れているのを感じて、喉^{のど}が渇くようだった。

暁夫の駒はなかなか生き返らなかった。そのうち、遼一の母親^{はは}が庭に出て来て、竹藪^{やぶ}の裏を流れる川で洗った、馬穴^{ばけつ}いっぱい洗濯^{せんたく}物を竿^{さお}に干し始めた。光のキラキラする白い布に

A

の紅が映えて、滴^{したた}り落ちる

水の玉が敷石の上にはじけた。干し終^{おわ}った竿を、鉤手^{かぎて}の付いた棒で上へ押し上げる時、太い足が伸びをした。男物の下駄^{げた}を履^{あしづ}いた蹠^{あしづ}の土踏まずのところだけが白かった。糸吉も炭屋のジンも順調に出世し、飛車と角行で

躍^せっていたが、暁夫は死に体、遼一もまだ香車で低迷していた。糸吉もジンも金将を振る時、駒が立つように振るのが上手だった。一つ横に立つと五、縦に立つと十、前へ進めるのだ。ジンは遂^{つい}に糸吉に追い付いた。同時に、ようやく暁夫も生き返って、彼の次に金将を振ったが、三が出て、次の角^{かど}を通り越してしまった。すぐ後ろには遼一の香車がいた。今度は遼一の番だった。彼は両の掌の中で四枚の金将をじゃらじゃらと鳴らし、それから駒をキツチリ揃^{そろ}えて指で抓^{つか}むと、ゆっくりと振った。みんな、あっ、と思った。遼一はどでかいことをやって退^のけた。一枚の金将を逆さに立てた。それで彼は一挙に王将になるのだった。が、他の三枚のうち二枚が重な^なっていて、これはクソだった。

「残念でした、ホームランすれすれの大ファール」

ジンが囁^{ささ}し立てるように言った。遼一をからかう調子が暢^のびやかで、小気味よかった。ジンは遼一と同年だからそんなことが言えたのだ。遼一は傷ついたことを目の色に出し、白目の部分を光らせて項垂^{うなだ}れてしまった。そして口の中に唾^{たな}でも溜^{たま}ったような声で、

「あわ、あわ」

と訳^{わけ}の分らないことを言ったかと思うと、白目を引き攣^{つか}らせて、後ろへゴトンと倒れた。頭が木槌^{きづち}にぶつかり、くると槌は半廻^{かいてん}転した。遼一の中から火取^{ひと}り返ったような形に硬直し、足を突^つく張^はるように反り返る力で、頭の後ろを土間に烈^{はげ}しく打ち付けた。木槌で土を叩^{たた}くような音だった。黒目の部分がふくれ上がって固定していた。

それが、暁夫が遼一の病気を見た最初だった。暁夫の感じでは、振った金将が逆さに立つのは殆^{ほとん}ど奇蹟^{きせき}に近いことだった。遼一の病気も、そんな

感じて暁夫の心に残った。

室ノ津から梅売りが来る頃だった。暁夫の家にも買った青梅が陰干^{いしほけ}しにされていた。彼が都倉^{まち}町の本多氷室^{ひょうしつ}へ氷を一貫目買^かいに行かされ、石仏^{いしぼつ}の道を駆け戻^{かへ}っていると、飾磨^{しきま}川に掛^かかった橋の下から声がした。

「(1)」

遼一が川で足を洗っていた。

「お婆^{まんしゅう}さんが満洲^{まんしゅう}熱^{ねつ}に罹^{かか}って、氷買^こいに」

② 暁夫は駆け足、足踏みのまま答えた。縄^{しづく}で括^{くく}った氷から滴^{しずく}がぼたぼた落ちていた。「自転車^{じてんしゃ}で買^かいに行^いったらええのに」

「自転車、バンク」

「これから雑^{ひよこ}買^かいに行^いくん、付^ついて来^こうへんか」

「どこへ」

「兼田^{かねだ}、わい家の自転車貸^かしたらあ」

暁夫はすぐにも行くと答えたかったが、婆^ばさまの病気^{びやうき}が気懸^がりだった。気懸^がりというより、母がまた麦刈^{むぎかり}りに行^いってしまえば、自分が家にいなければ、と気が働^{はたら}いた。

急いで家に帰ると、母は今日は田圃^{たんぼ}はお父さんだけにまかせると言った。暁夫は遼一の家へ行^いった。ちょうど遼一は一人で出掛^{でかけ}けるところだった。自転車の後ろに大きなボテ籠^{かご}を積^かんでいた。

暁夫の借りた自転車は二十四吋^{インチ}の大人用だった。ペダルが下に廻^{まわ}る時は足の先が届かないので、腰を左右に振^ふって蹴^けるように漕^こいだ。農協^{のうぎょう}の前の鹿谷^{かやだ}田の道を真^まッ直^すぐ東へ走^{はし}って行くと、道はやがて登^{のぼ}り勾配^{こうはい}になって、

市川の阿成村の土手へ出る。そこに橋があれば便利なのだが、河口の橋まで下らねばならなかった。片側に続く阿成村の家並みは二階の窓が土手の高さで、屋根屋根の奥から鍛冶屋の音が聞こえた。山陽電車の踏切りを渡ったところに吊橋がある。しかし入口に石の柵が設けてあって、自転車は通れない。遼一は自転車を持ち上げて吊橋の中へ入ろうかと言ったが、結局、河口の永世橋まで下ることにした。

橋の真ん中に、浜国道を西から走って来た大型トラックが立ち往生していた。タオルで鉢巻きをした運転手が、窓から乗り出して呶鳴っている。トラックの前に、腰が折れるように曲った老婆が、乳母車の半分毀れて骨だけになったのを押しながら、橋の中央を歩いているのだ。トラックが警笛を鳴らしても、老婆は端へ寄る気配も見せず、悠々と前へ乳母車を押していた。聞こえない振りをしているのだ。トラックの後ろに自動車が二、三台、②ジユス繋ぎになって、運転手は後ろの運転手に弁解もしなければならず、旺に前へ呶鳴ったり、後ろへ腹を立てたりしていたが、仕舞いには笑ってしまつて、乳母車と同じ速度でのろのろと動いていた。暁夫たちはトラックの側を擦り抜けるように前へ出て、妻鹿村の土手へ出た。そして再び市川の堤を北へ走って行つた。

道が岨道に差し掛かった。右手の国府山は殆ど垂直に盛り上がっていて、妻鹿城の城址が見える。軍師黒田官兵衛孝高が見張っていたところだ。血の滴るような青葉が山道に濃い影を落としていた。左手は、暁夫たちが対岸の桜林の河原へ泳ぎに来た時、天狗の顎と称んでいる崖だった。鳶の絡んだ松や漆が崖の途中に生い繁っている。水の流れが崖下の淵へ殺到して、ゆっくり青い渦を巻いていた。遼一が自転車を止めて、

「吸い込まれそうや」

と言った。渦は流れの方向とは逆に巻いているように見えた。暁夫はいつぞや婆さまから、この淵の底には、大きな横穴があつてな、その岩穴の奥できれいな女が機織りをしよんや、という話を聞いたことがある。

「行く」

と遼一を急ぎ立てた。

峠の岨道は下りになって、雨水に抉れて筋の出来た道を、自転車は滑って行つた。勢いがついて自転車はカタカタと鳴った。やがて道が山と分れ始めると、麦の穂の間に苗床の油障子の並ぶ風景が、急激に展けて来た。③目の中がふくれ上がって、自分が風景の中へ突進しているような気がした。そのまま自転車は土手の上を走って、兼田村の村中へ突入した。放し飼いの白犬を、遼一は危うく引つ掛けそうになった。彼は強引にハンドルを切つて、曲つたところの農家の庭に自転車を着けた。暁夫は慌ててブレーキを掛けた。

庭で「大波小波」をしていた四、五人の女の子が驚いて、飛び退いた。

遼一はそのうちの誰かに向つて、

「お母んおるか」

と言った。すると中で一番可愛らしい顔をした女の子が、土間へ消えた。そしてすぐにまたその女の子は出て来て、

「みんな田圃へ行つとんや」

と眩しそうに言った。

「すまんけど呼んで来て呉れへんか、雛貰いに来た言うて」

「……」

「野田の里見や、里見の遼一や」

女の子は「あ、そうか」という顔をして駆けて行つた。要綱の垣根の葉が赤い芽を出していた。残つた女の子たちは、

「郵便さん、郵便さん

葉書が十枚落ちました

ひいろつてああげましょう

と歌いながら、また縄飛びを始めた。遼一は不機嫌そうに、

④「女は人忘れが早い」

と呟いた。

暫くすると女の子の母親らしい女が戻つて来て、遼一の積んで来たボテ籠に雛を二十羽ほど入れた。雛は興奮した鳴声を上げ、籠の中で揉み合つていたが、遼一が粗筵を被せると静かになった。女の子の母親は、

「折角来て貰たのに何にもないな、ほんまに、何にももうて」

と何度も言いながら、蒸したジャガタ芋を呉れた。

「(2)」

遼一と暁夫は椽側に腰掛けて、女の子たちの縄飛びを見ながら芋を食べた。みんなスカートを押さえるように飛んだ。塩味が舌の根に残つて水が呑みたくなつた。帰りしなに、女の子の母親が、

「去んでから何と買いい」

と言つて、遼一と暁夫に五円ずつ呉れた。暁夫は来てよかつたと思つた。前から欲しいと思つていた大関三根山の写真を、その錢で買おうと思つた。遼一は男前の吉葉山を最肩にしていたが、暁夫はいつも小首を傾げた三根山の方が好きだった。

村の出外れの小川で暁夫たちと同じ年頃の男の子が三人、魚をとつてい

た。流れが橋の下へ入る手前で一人が網を張つていて、あとの二人が川上から追い込んで来る、というやり方らしかった。遼一は橋の上で止つた。石を二枚並べただけの小さな橋だった。

「何とりよん」

「われやどこの者ど」

「鮠か」

遼一は自転車に跨つたまま、橋の上の馬穴を覗き込んだ。

「勝手に覗くなッ」

川に浸つて網を持っていた男の子が呶鳴つた。上流から追い込んで来ていた二人が、畦へ上がつて駆けて来た。遼一は振り向きざま、暁夫に目配せし、いきなり馬穴を川の中へ蹴り込んだ。銀鱗が光った。

「(3)」

遼一は「それッ」と掛け声を掛けるや、足に力を入れて、自転車を走らせ始めた。ボテ籠の中で雛が飛び跳ねた。川の中の男の子は慌てて馬穴を拾つていた。暁夫は驚き、畦を走つて来る二人を見た。そして自分も慌ててペダルに力を入れた。

遼一と暁夫は夢中で逃げた。土手に上がつてから暁夫が振り返ると、追つて来る三人は意外に近くにいた。一人が石を拾つて投げる体勢に入つていた。暁夫が遼一を追い抜いた拍子に、石は飛んで来た。遼一は後ろのボテ籠が重そうだった。

「おーい」

遼一が切なそうな声を出した。しかし暁夫は道が組道に差し掛かるとこ

ろまで、一目散にペダルを漕いだ。山の下まで駆けて来て、振り返ると、

「おい、曉ッ、待て、待って呉れェ」

と息苦しく叫びながら、追い付いて来た。三人はもう石を投げても届かないほど離れた土手の上に立って、こちらを見ていた。

「何どッ、お前、一人だけで逃げて、すつこいど」

「ほやかて遼ちゃんが急にあんなこと……」

遼一は黙って睨み付けた。曉夫は遼一があの廻り将棋をした日に見せた目を思い出した。遼一がペダルに力を入れたので、曉夫も続いた。

「あいつら今頃、口惜しがつとぅど」

「うん」

曉夫は並んで走る遼一に相槌を打ったが、自分の裡に彼を咎める気持があるのを刺のように感じた。彼の顔を見ると、こめかみの辺りが蒼白かった。すると、彼から話を聞いた透明人間のことを想い浮んだ。その想像の中の透明人間の顔は遼一に似ているような気がした。二人が峠道を登って行くと、向うからオート三輪が走って来た。オート三輪は土煙を巻き上げ、かなりのスピードだった。山側ギリギリに遼一が前、曉夫が後ろと縦に並んで避けた。しかしオート三輪の方は二人の自転車と擦れ違う時も速度を落とさなかったで、ボテ籠を積んだ遼一は、よろけてオート三輪と接触しそうになった。そのはずみに後輪が滑り、危うく道の肩へずり落ちそうになった。それを遼一はサドルから身を浮すようにペダルを漕いで乗り切った。そこからは道は下りで、すぐ目の前は来がけに覗いた崖だった。遠く市川の河口に播磨灘が見えた。水の底で美しい女が機を織っているような、速い水の音が聞こえた。だし抜けに、遼一が、

「あわ、あわ」

という叫び声を上げた。喉の奥で筋肉が引き攣っているような声だった。遼一は何かに首を捻られるように振り向き、一瞬、曉夫の顔を見ると、再び、

「あわわわッ」

と叫んだ。口がクウドウのように開いていた。彼はそのまま自分から崖の下へ飛び込むように、自転車もろとも落ちて行つた。

夜になって遼一の亡骸が発見されたと聞かされた時、曉夫がまず思い出したのは、遼一が最後に振り向いた時の、目玉のふくれ上がった彼の顔だった。曉夫は里見の家の納屋で、大勢の大人たちに取り囲まれて泣いていた。母屋の方にも納屋の中にも煌々と電燈が点けられ、黒い人影が動いていた。家の東らの武思さんが、曉夫の肩を抱くようにして、

「曉、お前なんで家へ帰って来てじきに言わへなんだんど」

と言った。もう何人もの大人に問い詰められていた。曉夫はどこをどう通って帰って来たのかもよく憶えていない。言ったら怒られる、そういう気持で息が詰っていた。しかし一人で黙っているには余りに恐ろしいことだった。

B で逃げ帰って来ると、ちょうど村の倶楽部の前で紙芝居をやっていた。曉夫はフラフラとその人だかりの後ろに付いて「鉄仮面」を見た。それは僅か五分ほどの間だった。が、曉夫には、その僅かな間、言うのが遅れたがために、遼一は助からへなんだんやど、と言っているように、大人たちの言葉が聞こえた。普通に考えれば、帰って来るのにまず三十分以上は掛かる道程である。それに曉夫が崖の上から覗いた時に

は、遼一の姿は影も形もなかった。黝い渦が流れているだけだった。紙芝居を見るには見たが、おっさんの言うこともよく耳には入らなかった。終った時、傍らにいた糸吉に、

「(4)」

と言われて、ああ、自分は紙芝居を、と気が付いた。ジンが肩を突いた。

「暁、どないしたんど、顔が真ッ青やないかえ」

「エッ」

暁夫の胸は顫え出し、蹴爪突くように自分の家へ駆け込んだ。そして母に話した時から騒動が始まったのだが、やがてジンの家の者から、帰って来てから暢気に紙芝居を見とった、という話が伝わった。暁夫は村の人がいっばいいる前で、父親に、

「(5)」

と、横ッ面を張り飛ばされた。父も母も母屋で里見の家の者に何遍も謝っていた。赤い線の付いた消防団の法被を着た男が、屍が上ったという知らせを聞いて、興奮ぎみに、

「男の土左衛門は下向きに浮いとうらしいけど、女は上向きや、何せ重りがあらへんどのう」

と喋りながら、コップ酒を呷っていた。唇が赤く濡れていた。暁夫は、その男の話から遼一は川下の吊橋の下に浮き上がったということを知った。死んだら背中を見せる廻り将棋の駒のことが想い浮んだ。

遼一の葬殮から一年が過ぎた旧の盂蘭盆に、暁夫は母に連れられて遼一の家へお参りに行った。誰も子供のいなくなった里見の家はひっそりして

いた。暁夫たちが行つて、霊前の、水色の丸い岐阜提燈に灯が入ると、淡い蓮の花紋様が浮び上がった。水蜜桃を六個供えてお焼香をしたあと、遼一の母と暁夫の母は、冷えた麦茶を前にして、

「今年の夏は浮塵子がエライ」

とか、

「鍼やったら、姫路の五郎右衛門町の先生の方が上手や」

とか、とりとめのない百姓話を始めたが、言葉はすぐに途切れてしまった。

その翌日、今度は遼一の母が、婆さまの初盆に、と言って、白桃を六個抱えてお参りに来た。遼一の母が帰ると、暁夫の母は一個ずつ薄い紙に包まれたその白桃を検べるように手に取って、

「うち家が持つて行つたやつより上等や」

と呟いた。暁夫が手を出そうとすると、母はその手を払い退けた。しかし母が試みに一つ、桃を包んだ柔らかい紙を剥がして見ると、尻のところが腐っていた。慌てて次々に検べて見ると、全部同じような傷み方をしていた。母は顔を顰めて、六個の中でも特に傷みのひどい一個を指で剥き、彼に取って来させた庖丁で傷んだところを抉り取った。暁夫は自分の気持まで抉られるように感じた。母が、

「ほれ」

と差し出したが、

⑥ 「いらん」

と答えて、仏壇の横の床の間に飾ってある婆さまの写真を見た。生きている時には鳥のようだった目が、まだ生きているように、写真の外を見て

いた。

その日の午後、暁夫は村の仲間たちと連れ立って市川へ泳ぎに行き、流れに乗って天狗の顎の淵まで下った。機織姫の姿が頭に浮んだ。が、水の流れが速くて、とても水底の岩穴など見つけることは出来なかった。

帰りに小学校のグラウンドで野球をした。「四番サード藤村富美男」という風な役どころとは縁の遠い暁夫のポジションは、いつも外野だった。夏の日が白いグラウンドに照り付けていた。ややばてたような気持で、日時計のあるカダンの方を見ていると、鋭い打球音が聞こえた。糸吉が打ったのだ。大きなファールだった。ボールを拾いに走って行くと、球は小屋の蔭に転がっていた。

「暁ッ」

ホームベースのところでバットを担いだ糸吉が、呶鳴った。

「早ボール放らんかえッ」

白い歯を見せて笑ったその顔は、もうすっかり遼一のことなど忘れた顔だった。

(車谷長吉「白桃」による)

注 どうじょ 道祖神。

岨道 険しい山道。

浮塵子 昆虫の名。稲の害虫になる。

問一 波線部㊦㊧のカタカナの語を漢字に改めなさい。

問二 傍線部①「暁夫は妬ましさを覚えた」について、暁夫が覚えた「妬ましさ」とは具体的にどのような気持ちを指すか。最も適切なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 遼一が自分よりも先に外国の映画を観たことにくやしさを覚えながらも、自分も観たくてしかたがない羨ましさを抑えきれない気持ち
イ 蛇をなぶり殺しにしたことを恐れているはずなのに、外国の映画を観た話をして誤魔化していることへの憎らしくも羨ましく思う気持ち
ウ 蛇をなぶり殺しにしてしまったことにおびえる自分や糸吉に対し、心配する様子をまったく見せないことに憎らしくもあこがれる気持ち
エ 婆さまから聞いた蛇の話をせっかく教えたのに、外国の映画を観た話をして話題を変えられたことに対し、悔しくもわくわくする気持ち
オ 外国の映画を観たことを話す遼一に憧れる一方で、婆さまから聞いた田舎くさくてつまらない話をした自分を恥ずかしく思う気持ち

問三

A

に入る言葉を文章中から漢字二文字で書き抜きなさい。

問四

(1)

(5)

には次のア～オの会話文のいずれが入る。

それぞれ適切なものを選び、記号で答えなさい。ただし、同じ選択肢を二度用いることはできません。

ア 暁ッ、どこへ行ったんだ

イ ド阿呆！

ウ この続きどないなるんやろ

エ へ、あんたにもお一つ

オ 何するんどッ

問五 傍線部②「暁夫は駆け足、足踏みのまま答えた。」について、この描写から暁夫のどのような様子を読み取ることができるか、十字程度で答えなさい。

問六 傍線部③「目の中がふくれ上がった」とは、どのような状況を比喻していると考えられるか、答えなさい。

問七 傍線部④「女は人忘れが早い」と呟いた時の遼一の気持ちとして最も適切なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 女の子が自分を憶えていなかったことに、暁夫の前でバツの悪さを感じている。

イ 以前会ったことがあるにもかかわらず、自分のことを無視する女の子の薄情さにあきれている。

ウ 初めて会ったとはいえ、客人にまったく気を遣う様子のない女の子を苦々しく思っている。

エ 会ったことがあると思っていたが、初対面であったことがわかり、恥ずかしくて誤魔化そうとしている。

オ 女の子の応対が予想していた通りだったので、自分は女のことをよく知っていると得意げになっている。

問八 傍線部⑤について、この「目」はどのような心情を表しているか。そのことを示す一文を本文から書き抜きなさい。

問九

B

 には四字熟語が入る。一文字目と三文字目の空欄に漢字を入れて適切な熟語を完成させなさい。

問十 傍線部⑥について、暁夫はどうして母に差し出された白桃を拒んだのか。その理由を答えなさい。

問十一 文章中に述べられている内容と合致するものを、次のア～カの中からひとつ選び、記号で答えなさい。

ア 天狗の顎と呼ばれた崖は暁夫たちが渡らなかつた吊り橋のさらに河口のあたりに位置する。

イ 暁夫たちが以前泳ぎに来たことがある桜林の河原は市川の東岸にある。

ウ 暁夫たちは市川の西岸に位置する妻鹿城の城址を仰ぎながら兼田に向かった。

エ 天狗の顎の崖下の淵は水の流れが急で、誰も立ち入られないほど危険である。

オ 暁夫たちが渡った永世橋の北には吊り橋が架かり、また山陽電車が通っている。

カ 暁夫たちは雛を買うために阿成村から土手を北に向かって進み川を渡った。

【二】 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

茨木のり子の詩にはなよなよしたところがない。甘えがない。人への、男への、あるいは自分への甘ったれがない。むしろ、そんな女々しさや、うじうじしたものがもしあなたにあるなら、私の詩で一風呂浴びて、しゃっきりとして出直していらいしゃい、とでもこの女流詩人は言っているかのようなのである。

（A）、彼女の詩は応援歌か、メーデーの歌のようなものか。この詩「六月」には、いくらか、どこか、そのような響きがないでもない。彼女の理想主義が底に強く流れているからである。しかし、この作に限らず彼女の詩は、もちろんそんな野蛮な、粗野なものではない。ポパイのように力こぶを見せて、ほうれん草を喰うなどというものではない。

詩人臭く凝った難解なゴイや言いまわしを使うのでもなく、繊細ぶるのでもない。平明で、鮮明で、立ちすがたがまことにすっきりとしている。しかも読む者の心臓をまっすぐに打って、そこに新たなすこやかな鼓動を打ちはじめさせる。知・情・意がおのずからなバランスをとって、ユーモアもたたえてしなやかならだを弾ませている。それが、茨木のり子の詩の世界だと言おうか。

この「六月」もほぼそうである。

六月

どこかに美しい村はないか

一日の仕事の終りには一杯の黒麦酒

鍬を立てかけ 籠を置き

男も女も大きなジョッキをかたむける

どこかに美しい街はないか

食べられる実をつけた街路樹が

どこまでも続き すみれいろした夕暮は

② 若者のやさしいさざめきで満ち満ちる

どこかに美しい人と人との力はないか

同じ時代をともし生きる

したしさとおかしさとそうして怒りが

鋭い力となって たちあらわれる

作者の第二詩集『見えない配達夫』（昭和三十三年）に載せられた一篇である。同詩集でこの作と並んでいる「わたしが一番きれいだったとき」などとともに、よく高校国語の教科書に選ばれて載っている。それにふさわしい、いい作品ではなからうか。

どこかに美しい村はないか

……

どこかに美しい街はないか

……

どこかに美しい人と人との力はないか

……

と、詩人は三連のそれぞれの冒頭の行で繰返し問うている。自分に向かつて、読者に向かって、男の声のような強い調子で。——「どこかに」は本当に人にたずねるような尻上がりの口調で読まれ、次に三度同じ「美しい」が、五音であることもあつて際立つてはつきりと強く発音されて、そこでわずかに息を切り、「村」「街」「人と人との力」とつづいてゆくのである。^③「美しい」が大事なのである。それはただの「いい」でも「すてきな」でも「立派な」でもない。真・善・美を兼ねそなえている欲張りな「美しい」であるらしい。(B)、これは堀辰雄の信濃追分の「美しい村」でもなく、佐藤春夫の「美しい町」でもないらしい。疑問詞の「ないか」も、「ないのか」や「ないだろうか」の皮肉や逡巡^{しゆんじゆん}を含まず、ぶっきらぼうなほどに、男まさりに、直截^{ちよくせつ}である。そしてその問いかけのシヨツクによって、夢想でもある理想の、理想でもある夢想の土地の映像をよびおこし、くりひろげてゆく。

第一連では、それはどこか異国の、贅沢^④ではないが豊かな、秩序ととのつて安らかな、農村の情景である。「黒麦酒^{ビール}」とか「ジヨツキ」とかの語が、それが日本ではないことを語っている。どぶろくでも「ワンカップ大関」でもないのだ。どぶろくの男どものうしろめたい猥雑^{わいざつ}も、「ワンカップ大関」のせつかちでケチな陽気さもここにはない。「男も女も」平等と一緒に、堂々と、ゆったりと、「大きな」重いジヨツキを呑み干すのである。「一日の仕事の終りには……」というから、そして題名にいうように一年でいちばん日の長い「六月」なのだから、あたりにはまだ明るい

夕映えも残っているのだろうか。彼らは入口に「鋏^{くさ}を立てかけ 籠^{かご}を置」いて、おそらく仕事着の埃^{ほじり}もはたいて、どつしりと、席についたのだろう。エチケットを破ることが親近感を表わすエチケットであるような、日本の酒場とはちがうらしい。「鋏」や「籠」が、それぞれに男女の耕作や収穫の仕事を象徴していることは、いうまでもない。

農耕という、大地の上の、自然のリズムに従った肉体労働。それを一日果たしたあとの大きな安らぎと充足感。ことさらにでない、当然のこととしての男女の平等。彼らが坐^{すわ}った大きな分厚い木のテーブルや彼らの大きなジヨツキのように、こせつくことのないずしりとした仕種^{しぐさ}と時間の流れ——それらが、この詩人の「美しい村」に託した価値なのである。

第二連では、それはまたどこか遠い国の、ひろびろとして、夕暮れは「すみれいろ」に光るといふ都会である。「街路樹が／どこまでも続き……」などという町が日本にはあるだろうか。「食べられる実をつけた街路樹」というのも面白い。戦争中のあのキガ感^①を知る世代に属する作者の、いつも豊かに食べもののあることへの願いの言葉か。昔からこの国でも子供たちが夢みてきた「お菓子の国」の映像が底にひそんでいるのか。いずれにしても、赤い、あるいは黄色い木の実が葉蔭^{はかげ}に光る街路樹のイメージは、豊かで、香ぐわしく、美しい。詩人は自覚していたかどうかかわからないが、ここはゲーテ作森鷗外訳「ミニヨンの歌」(『於母影^{おもかげ}』明治二十二年)の——

レモンの木は花咲くらき林の中に
こがね色したる柑子は枝もたわいにみどり

青く晴れし空よりしづやかに風吹き……

につらなるものがあることは、確かである。ただし、「六月」という題名が、もし詩全体をくまなく支配しているとしたら、ここはあのルビーのように赤い桜んぼの実をならせた街路樹なのであろうか。

その街路樹の果てから「すみれいろした夕暮」がひろがってくる。第一連でも「一日の仕事の終り」の夕暮れの情景であった。この第二連の「美しい街」にも、紫に薄い紅くれないのにじんだ六月のさわやかな夕暮れがひろがるのである。

すると、それとともに、その「夕暮」のなかに低い潮騒しほざいのように満ちてくるのが「若者のやさしいさざめき」だという。June bride(六月の花よめ)という言葉さえあるではないか。西洋では、ローマ以来、六月は結婚の保護者・女神ジュノーの月、それゆえ「六月の結婚はしあわせ (June marriages are happy)」と言いつたえられてきた。「美しい街」の若者たちは、この六月の澄んだ「すみれいろの夕暮」のなかに、すこやかにやさしい愛をささやくのである。

こうして、ここまで来ると、題名⑤の「六月」のイメージがようやくわかってきたような気がする。それはすぐに五月雨さみだれや梅雨つゆを思わせる日本の伝統的な六月(陰暦五月)の像ではない。そのシツシユン⑦さのない、「黒麦酒ビール」が渴いた喉にしみてうまい high summer (盛夏) の六月、日は長く、緑はようやく濃く、麦は黄金色に稔みのって収穫とりのいれに忙しく、桜んぼは赤く熟して若者たちが恋から結婚へといそぐ六月——そのような北半球の中緯度以上の、日本ではないどこか異国の、「美しい村」「美しい街」の六月に行っ

て住むことを、一九五〇年代半ばすぎの日本の若い女流詩人は夢みたのであった。

そうしてみると、第三連は、にわかにあまりに道徳的で、第二連までのそれなりに心をそそる美しい映像のふくらみを、狭く固く抑えこんでしまうのではなからうか。茨木のり子が余計な気どりをせずにストレートにものを言う詩人であることはいい。だがこの第三連では、読む者の想像力に訴える具象的イメージは一つもなく、知・情・意の「意」のみが強く出すぎたきらいがある。わずか三連十二行の詩のなかで、少しせいて口コツ⑧に「テーゼ」を出しすぎたのではなからうか。やはり、メーデー・ソングになりにかけたのではないか。

そのために、第三連では語法もいささかあやしく、茨木のり子にあるまじく不鮮明である。「美しい人と人との力」は「人と人との美しい協力」の意味であろうが、「どこかに」と問うのに対しては、「村」や「街」にくらべ長つたらしすぎて、弱い。二行目「同じ時代をともに生きる」も、要するに「セカイヲツナゲ ハナノワニ」の意であろう。だが、これももって廻りまわりすぎて(また、前の行にかかるのか、次の行にかかるのか、あいまいで)訴えが弱い。三行目「したしさとおかしさとそうして怒りが」は、それぞれの語句も、その並べ方も面白い。友愛と、とらわれない笑いと、なにか共通の理想のための義憤、との意味である。だが、最後の行で、それらが一つになって「鋭い力となって たちあらわれる」となると、ついにあまりにも抽象語が重なりすぎて、この第三連は崩れかかる。各連最終行の連体形(「かたむける」「満ち満ちる」「たちあらわれる」)は、前の二連では、それなりに弾力をもって跳躍して第一行の「美しい村」「美しい

街」にかかつてゆくことができたのに、この最終連では第二行の連体形にさえぎられたこともあって、その力を失ってしまった。

(C)、それでも、一九五〇年代の日本詩人としては、こう言わざるをえなかったのだろう。また、こう言えば、彼女の意は、当時彼女の詩を読むほどの人にはすぐ伝わったのである。そのような歴史的な回顧^{リトロスペクティブ}の展望をも、ジャツカンはこの詩に加える必要があるだろう。日本人が敗戦後の悲惨と空腹と失意ととまどいからようやく立ち直って、身はまだ貧しくとも、平和のなかの安息と豊かさ^④と正義とを求め、その理想になお敏感に反応しながら懸命に働いていた時代、そしてその理想をすでに実現した国が世界のどこかにあるはずだとまだ思っていた時代——茨木のり子はこのぎこちなくても切実で、そのことが美しい詩のなかに、そのような時代の証言を刻みこんだと評すべきであろう。しかも、いまもおこの詩には、一九五〇年代とはおそらく別な意味で、私たちの身のまわりを顧みさせ、さらに遠くへと想いを馳せさせる力があるのではなからうか。

(芳賀徹「六月のユートピア——茨木のり子の詩一篇」による)

注　　メーデー＝五月一日に世界各地で行われる労働者の祭典。労働者が権利を要求するために行進や集会を行い、団結の威力を示す。
ポパイ＝アメリカの漫画家エルジー・クリスラー・シーガーのギャグ漫画の登場人物で、一九三〇年代に短編アニメ映画の主人公として人気を博した。ほうれん草を食べると、超人的パワーを発揮する。

堀辰雄＝近代日本の小説家。一九〇四―一九五三。「風立ちぬ」

「美しい村」などの小説で知られる。長野県軽井沢町で晩年を過ごした。

佐藤春夫＝近代日本の詩人・小説家。一八九二―一九六四。清麗な詩歌と倦怠・憂鬱の小説を中心に、文芸評論・随筆・童謡・戯曲・和歌など、その活動は多岐にわたる。「田園の憂鬱」「殉情詩集」などの小説・詩集がある。

ゲーテ＝ドイツの代表的な詩人・小説家・劇作家。一七四九―一八三二。小説「若きウェルテルの悩み」や戯曲「ファウスト」の作者として知られる。

『於母影』＝森鷗外・落合直文など新声社の同人による訳詩集。明治二十二(一八八九)年発表。ゲーテやバイロンなどの西欧の詩を和文・漢語の長所を取り入れて翻訳し、新体詩を芸術的に高めるきっかけとなった。

柑子＝柑子蜜柑。平安時代から栽培された柑橘類の一種。

「セカイヲツナゲ　ハナノワニ」＝一九七四年のメーデーを前に公募した新メーデーの歌に、第二席で入選した労働歌「世界をつなげ花の輪に」(篠崎正作詞、箕作秋吉作曲)の一節。

問一 波線部㉞㉟のカタカナの語を漢字に改めなさい。

問二 (A) (B) (C) に入れるのに最もふさわしい接続語を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ語を二度用いることはできません。

ア そこで イ だから ウ それから エ なぜなら
オ だが カ それならば キ むしろ

問三 傍線部①「応援歌か、メーデーの歌のようなものか」とあるが、筆者はそれをどのようなものと感じているか。文中の語を用いて答えなさい。

問四 傍線部②「若者のやさしささめき」とあるが、それは具体的にはどのようなものを指していると筆者は考えているか。文中の記述を踏まえて述べなさい。

問五 傍線部③「『美しい』」を筆者はどのようなものと考えているか。文中の語を用いて述べなさい。

問六 傍線部④「贅沢ではないが豊かな、秩序ととのつて安らかな、農村の情景」とあるが、それはどのように言い換えることができるか。文中の記述を踏まえて述べなさい。

問七 傍線部⑤「題名の『六月』のイメージがようやくわかってきたような気がする」とあるが、題名の「六月」に託されたイメージを筆者はどのようなものと解釈しているか。文中の記述を踏まえて述べなさい。

問八 傍線部⑥「第二連までのそれなりに心をそそる美しい映像のふくみを、狭く固く抑えこんでしまう」とあるのは、第三連のどのような欠点を指摘したものか。文中の記述を踏まえて説明しなさい。

問九 傍線部⑦「一九五〇年代の日本詩人としては、こう言わざるをえなかったのだらう」とあるが、筆者が考える一九五〇年代とはどのような時代であったか。文中の記述を踏まえて説明しなさい。

【三】 次の文は日本の近代文学者について述べたものであるが、それぞれ誰について述べたものか。その作家名をA群から、関係の深い作品をB群から選んで、それぞれ記号で答えなさい。

一 明治十六（一八八三）年、宮城県石巻市に生まれ、生後二年で旧相馬藩主相馬子爵家の家令をしていた祖父母と同居するため東京に移る。学習院初等科・中等科・高等科を経て、明治三十九年に東京帝国大学英文科に入学。翌年、武者小路実篤・木下利玄らとともに文学研究会をつくり、同四十三年の大学中退後には、武者小路らと雑誌『白樺』を創刊し、白樺派の中心人物として活躍した。昭和四（一九二九）年には、満鉄の招待で満洲各地や天津・北京を旅している。短編小説に優れ、「小説の神様」と称された。代表作に、『網走まで』『小僧の神様』『暗夜行路』などがある。短編『范の犯罪』は、范という中国人の奇術師が彼の妻と親友との関係を疑って、ついには殺人にいたる心理を書いたものである。

二 明治四十（一九〇七）年、北海道に生まれる。六歳で父母のもとを離れ、父母の郷里の伊豆湯ヶ島で祖母にあずけられて育った。この間のことは、自伝的小説『しろばんば』などに描かれている。京都帝国大学哲学科に入学したが、学校にはほとんど顔を出さず、戯曲や懸賞小説応募作を執筆して賞金稼ぎをするなど放埒な生活が続けた。大学卒業後、大阪毎日新聞社に入社。美術評論を執筆するかたわら、詩作にも情熱を注いだ。戦後、四十歳のときに執筆した『闘牛』が芥川賞を受賞。新聞社を退社して多忙な作家生活に入った。第二次中国訪問日本文学代表団の

一員として当時まだ国交のなかった中国を訪れて以来、たびたび訪中し、日中文化交流協会会長を務めるなど、中国との関係も深い。その作品には、中国の西域に材を取った『西域の人』『楼蘭』『蒼き狼』などがあり、晩年には『孔子』を著している。

三 明治四十二（一九〇九）年、青森県の地主の六男として生まれる。早熟で感受性の鋭い子供として成長し、中学時代から校友会誌や同人誌に習作を発表。旧制弘前高校より東京帝国大学仏文科に進み、井伏鱒二を訪ねて師事した。しかし、芸妓の女性との同棲や女給との心中事件、左翼運動への関係と脱落、鎮痛剤バビナル中毒など、生活は一時頹廃を極めた。結婚の後は一転して環境も安定し、旺盛な創作意欲を示して『走れメロス』『新釈諸国断』『津軽』『お伽草紙』などを著した。戦後、すぐに流行作家として脚光を浴び、『ヴィヨンの妻』『人間失格』などの代表作をものしたが、生活は再び破滅的傾向を見せ、ついに愛人と玉川上水で入水自殺した。彼の処女創作集『晩年』所収の「魚服記」は唐代の小説のタイトルを取ったもの。また、戦時下に書かれた『惜別』は、仙台医専時代の魯迅を描いている。

四 大正十二（一九二三）年、大阪市に生まれる。本名は、福田定一。昭和十六（一九四一）年、大阪外国語学校蒙古語部に入学したが、同十八（一九四三）年、仮卒業で学徒出陣、加古川の戦車連隊に入営し、満州に渡る。敗戦後は京都の新日本新聞社を経て産経新聞社に入社し、昭和三十六（一九六一）年に退社するまで、十三年勤務した。昭和三十四

(一九五九)年、『梟の城』で直木賞を受賞。以後、『燃えよ剣』『国盗り物語』『坂の上の雲』などの傑作を次々と発表した。中国の周辺に暮らす少数民族に深い関心を持ち続け、それは初期の『戈壁の匈奴』から晩年の『韃靼疾風録』に至るまで変わることなかった。また、『項羽と劉邦』には、この作家の中国の歴史と文化に対する深い造詣が示されている。

〔A群〕

- | | | | |
|---------|---------|-------|--------|
| ① 谷崎潤一郎 | ② 井上靖 | ③ 太宰治 | ④ 夏目漱石 |
| ⑤ 中島敦 | ⑥ 司馬遼太郎 | ⑦ 森鷗外 | ⑧ 中勘助 |
| ⑨ 志賀直哉 | | | |

〔B群〕

- | | | |
|----------|-----------|-----------|
| ① 『銀の匙』 | ② 『細雪』 | ③ 『竜馬がゆく』 |
| ④ 『山椒大夫』 | ⑤ 『城の崎にて』 | ⑥ 『斜陽』 |
| ⑦ 『天平の甍』 | ⑧ 『風立ちぬ』 | ⑨ 『山月記』 |

【四】 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

思考のカテゴリーというものは、われわれがふつう具体的事象を判断する際に、われわれにとっては多かれ少なかれ所与^①としての意味を持つてい^②る。人間はどんな場合でも、「無」から思考し、行動しているのではなく、一定の歴史的・社会的条件の下でそうしているが、このような歴史的条件というのは、たんに彼をとり囲む社会的環境として存在しているのではなくて、彼に先行する歴史的時間において蓄積されたさまざまな思考のパターンとして、主体の内側に入りこんでいる。ち^③ょうど眼鏡をかけている人が、べつだん眼鏡を意識しないでものを見ているように、われわれはほとんど無意識的にそうしたパターンに依拠しながら状況に対応しているわけである。

（丸山眞男『忠誠と反逆』による）

問一 傍線部①「所与」の意味として最も適切なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分で選択できる条件
- イ 文化的に異なる価値観
- ウ 前提として扱われる要素
- エ 歴史的に自明の事実
- オ 人類に普遍的な規範

問二 傍線部②「持つている」の主語にあたる名詞句を本文中から抜き出さなさい。

問三 傍線部③「ち^③ょうど」と同じ品詞の単語を本文中から、二つ抜き書きなさい。